

町史

とっておきの話

252

東洋大学講師

久野 俊彦

国内で三番目に古い写本

只見本『実語教・童子教』

吉祥院に伝来した
中世写本

修験道のホウインは、村の子どもたちに読み書きの手習いを教えました。そのため、手習いの教育書が多数残されています。その中でも、吉祥院（新町・五十嵐義博家）に伝来した『実語教童子教』には、「天文十七年戊申十一月廿日 是書」（二四八年）という書写奥書があり、中世写本として注目されます。『実語教』は、「玉磨かざれば光なし」という言葉で知られる教訓書で、平安時代末期に成立しました。『童子教』の中の言葉では、「郷に入りては郷にしたがえ」が有名で、こちらは鎌倉時代中期以前の成立とされます。両書とも子どもに教える短い教訓的な言葉を集めた書物で、漢文で書かれています。中世・近世・明治初期にかけて、教訓書として普及し、これを書写したり、暗唱したりしました。別々のものだった『実語教』と『童子教』は、一つ

ツトで教育に用いられ、江戸時代には版本で多量に流通しましたが、江戸時代以前の中世の写本はきわめて少ないです。最古の『実語教』の写本は、文明十一年（四七九）に書写した『実語教童子教』（謙堂文



▶『実語教』の巻頭部分



▶『実語教』の奥書部分

庫蔵）で、次いで明応六年（四九七）書写の『実語教童子教』（東洋文庫蔵）があります。『童子教』の写本は、永和三年（三七七）書写の『童子教』（石井積翠軒文庫旧蔵）が最古の写本です。吉祥院の『実語教童子教』は、『実語教』『童子教』

の二つがそろった写本では、国内三番目の古写本となります。

吉祥院に伝来した只見本『実語教・童子教』は、当地で書写されたためか、書写する時の誤りや脱落がみられますが、落丁はなく、返り

点と送り仮名が付いているので、中世における『実語教・童子教』の読み方がわかり貴重です。

村人が使い続けた書物

表紙と見返しには、「海老作□女、只見邑 吉祥院、斯主膳覚、五十嵐庄蔵」という持ち主の名の書き込みがあります。海老作は五十嵐家の屋号であり、これらは吉祥院（五十嵐家）の人物の書き込みです。また、「此書、何方へ遣シ申候とて、其後二者私方へ御かいし可被下候」という文が書かれています。この書物を持ち主に必ず返してほしいという意味ですが、持ち主は、これを門外不出としたのではなく、村人に貸し出していったということなのです。借り出した村人は、必ず返したからこゝろ、五十嵐家に伝えられました。この書物は、只見の村落の中にあつて、戦国時代から江戸時代末期までの約

三百年間にわたつて、大切に利用され続けました。只見の村落が、中世から近世・近代に至る持続社会であったことを、書物の手擦れの跡が立証しています。

只見本の読み方による『実語教』『童子教』

吉祥院に伝来する『実語教・童子教』は只見に残つた只見本といえます。その中から有名な節をご紹介します。

『実語教』山高き故に貴からず。木有るを以て貴しとす。人肥か故に貴からず。智有るを以て貴しとす。（山は高いから価値があるのではない。そこに木々があるから価値があるのだ。人は裕福だから偉いのではない。智慧があるから偉いのだ）

『童子教』国に入りては俗を問へ。郷に入ては郷に随へ。（中略）一日に字を習へば、三百六十字。一字千金に当たれり。（よその地に行つたらその習慣を知りなさい。そこではそのやり方にしがたいなさい。一日に字を習うと、一年で三百六十字を習う。一字は千金に相当する）